

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | A. Camusとドストエフスキーの『悪霊』について：ニヒリズムと自由を中心にして   |
| Author(s)  | 辻, 昭臣   |
| Citation   | フランス文学 , 10・11 : 45 - 51  |
| Issue Date | 1969-04-30  |
| DOI        |   |
| Self DOI   |   |
| URL        | <a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040898">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040898</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



## A. Camus とドストエフスキーの 『悪霊』について

——ニヒリズムと自由を中心にして——

辻 昭 臣

二十世紀の文学者で、ドストエフスキーの影響を何らかの形で受けなかった者は皆無と言っても良いだろう。カミュもまたその例外たることを免れ得なかった。人間の真実の在り方を追求するカミュの脳髓と肉体を占めるドストエフスキーの思想の重みは、カミュの生涯に渡って、彼の生き方や思想を方向付けた。カミュの思想の主流をなすものは、あらゆる種類のニヒリズムからの救済の道である。その中でも、最も大きなニヒリズムは、個人的なニヒリズムの自殺と、他者に対するニヒリズムの殺人であり、この二つのニヒリズムの克服と、それらからの人間の救済こそカミュがその全生涯を賭けて追求した問題に他ならなかった。ニヒリズムを克服するということは、人間が非人間的なものと戦い、自己の本当の自由を獲得することを意味する。ニヒリズムと自由という観点から考えると、ドストエフスキーの数ある巨峰のような作品群の中で、とりわけ『悪霊』のカミュに対する影響は決定的なものであり、また持続的なものであった。このドストエフスキーの洞察に満ちた予言の書物に撒かれた様々な種は、カミュの思想的な風土で次のように開花している。即ち、『シジフォスの神話』Le Mythe de Sisyphe における、不条理の提出する反抗と自由の問題、また『反抗的人間』L'Homme révolté における、反抗がもたらす相対的自由と反革命的な思想が主なものである。

周知の様に、ドストエフスキーの『悪霊』の中心主題は、シャートフの殺害にまつわる革命的な思想に対する風刺と、キリーロフの新しい神の創造と、それにともなう自殺が引き起す反抗と自由の問題である。この論文では、先ずカミュが『シジフォスの神話』で取上げているキリーロフの自殺に焦点を合わせて、そこから導き出されるニヒリズムと、自由と反抗によってそのニヒリズムがどのように克服されるかを考えてみることにする。

『シジフォスの神話』の中で最も中心になる問題は、カミュ自身がこの書物の冒頭で提出している《自殺の問題》である。不条理の推論の果てに到達する「死に至る論理はあるか？」という問いかけこそ、形而上学的自殺の問題を解決する糸口となるものである。この問いかけに対するカミュの直接的な解答はない。しかし、『悪霊』の中の一登場人物であるキリーロフを介して言及しているということは注目に値する。作者ドストエフスキーの「明証の光」によってキリーロフは、論理の果てまで行くから、彼の自殺は論理的自殺と呼び得るものである。キリーロフは、カミュに対して不条理の問題の最も重要な点である自殺における「死に至る論理」についての格好の素材を提供してくれた。

キリーロフの論理とはどのようなものかということ、カミュは『シジフォスの神話』の中

で次の様に要約している。

「神 (Dieu) が存在しないならば、キリーロフが神 (dieu) である。神が存在しないならば、キリーロフは自殺すべきである。故にキリーロフが自殺して神となるべきである。」

(Pléiade 版, p. 183)

このような論理が通常の人間の判断に耐え得るためには、キリーロフの意識は完全に目覚めていなければならない。少なくとも、彼がこの論理を提出する時には、彼の意識は目覚めていたということを我々は認める必要がある。ところで、彼の論理の前提となっている「神が存在しないならば、キリーロフが神である。」では、神というものは、いかなる意味の神でも究極的に存在しなければならないのか？という疑問を抱かせるが、その解答は次のように言えるだろう。即ち、キリーロフにあっては、理性は神の存在を否定しても、世界の不可解さに直面して、心情とか感覚が神を否定することができないから、彼は自己の神性というものを追求しなければならない。そしてそれを次の様に規定する。

「私の神の属性とは独立である。」

彼は、それまでのキリスト教の古い神 Dieu を否定し、新しい神 dieu を創造しようとする。彼が神になるのは、死の恐怖を克服することが第一の目的であるが、それと同時に神の意志から逃れて、自己自身に依存した全面的な自由を獲得するためである。それは、自己の思考や行動の法則を自ら定める権利を持つことである。

それでは、キリスト教の神を否定しなければ、人間はどうしても自由になれないのだろうか？この問題を解決するためには、キリスト教における自由というものを考えてみなければならない。

キリスト教では、キリストの十字架によって人間のすべての罪が許されたとする。従って神は、キリストの受難によって人間に全面的な自由を与えたことになる。なぜならば、自由とは罪から限りなく遠ざかることであるから。しかし、本当の意味での自由というのは放縦などとは違うものだから、山上の垂訓という多くの掟によって人間の行為に制限をもうける。一方で許し、他方で拘束することによって完全な自由が保証される。しかし、ここで問題となるのは、キリストの十字架に欺瞞があるのではないかということである。もし欺瞞があれば、人間は罪から解放されることはできないし、その罪そのものを造った神の意志によって拘束されるから、人間には全面的な自由はないことになる。キリーロフは断固としてこの欺瞞を告発する。彼は、キリストが死んでも天国にも行かず、復活もできなかったと考える。彼は、キリストを神人でなく人神とみなしている。彼は自殺する前に、自分の論理を説明するために、ピョートルに向かって次の様に言っている。

「一つ君に偉大な思想を聞かしてやろう。かつてこの地上に一つの日があった。そして、この地球のまん中に、三つの十字架が立っていた。十字架の上にあった一人は、きわめて深い信仰を有していたので、いま一人の者に向って『お前は今日わしと一緒に天国におもむくだろう』とまで断言した。やがてその日は終って、二人とも死んでしまった。そして、ともに旅路に上ったけれど、天国も復活も発見できなかった。予見はついに

適中しなかった。いいか、この人は全地球における最高の人で、地球の生活の目的となっていたのだ。この一つの遊星も、その上にあるいっさいのものも、この人がいなかったら、ただの狂乱世界に過ぎない。この人の前にもあとにも、これくらいの人がかつて出て来なかった。それはじっさい奇跡と言っていいくらいだ。つまり、こういう人はこれまでもなかったし、今後も決して出て来そうにない、そこに奇跡が含まれているわけなのだ。もしそうとすれば、もし自然律がこの人をも容赦しないで、——自分の奇跡さえ容赦しないで、『彼』をして偽りの中に生き、偽りのために死なしめたとすれば、当然この遊星ぜんたいが虚偽の塊で、愚かしい嘲笑と欺瞞の上に立ってるわけなのだ。してみると、この遊星の法則そのものが虚偽なのだ、悪魔の喜劇なのだ。いったいなんのために生きるのだ、もし君が人間なら答えて見ろ。」

(米川正夫訳『悪霊』第三篇、第六章、岩波文庫版(四) p. 291-p. 292)

このような考えのもとに、自己が神となり、キリストの十字架の欺瞞を解消し得たと信じた後に、なぜキリーロフは自殺しなければならないのだろうか。カミュはその理由について次の様な卓越した説明を与えている。

「人間はみな道を示してもらうことを必要としており、予言なしではすまされないのだ。それ故にキリーロフは人類愛によって自殺しなければならない。」

(『シジフォスの神話』p. 185)

キリーロフは、人類の解放のために自由の十字架を背負ったのである。このような意味における彼の自殺には天国も復活も必要としないから、キリストの受難の欺瞞が割り込む余地はない。しかも彼はあの世の永生を信ぜず、この世の永生を信じているのだから、来世に対する希望は彼にとって無縁である。彼の反抗の矛先が神と死の恐怖に対して向けられるという意味では、キリーロフは不条理の人間の一人である。しかし、カミュも指摘している通り、自殺するという点では不条理の人間とは異なる。

「人類愛」によるキリーロフの自殺は、人類に本当の自由をもたらしたのだろうか。キリストの神を否定して、自分自身が神だと称しても、たかだか彼固有の神の属性を持つに過ぎず、しかも罪の問題が見落されている。彼は確かに自分は自由だと感じたことだろう。しかし、彼は全知全能となることはできなかったから、人類全体を救済して自由を与えることは不可能である。その不可能性を最も良く知っていたのは、小説家としての驚嘆すべき洞察力を持ったドストエフスキーその人自身である。キリーロフの自殺が、ピョートルら一味によるシャートフの殺害に利用されるという小説上の周到な設定こそ、ドストエフスキーのニヒリズムに対する沈痛な警告に他ならないのである。この警告が、カミュの反抗的思想を形成するための一条の光明となった。

ところで、『悪霊』は、カミュが証明している通り、一個の不条理の作品であるから、キリーロフの自殺や、ピョートルらの革命運動にともなう非人間的な殺人に対しては何ら答えを与えていない。この作品が完成した時には、すでに作者によってこれらの問題は乗り

越えられていたのである。そこから生じる作品の深い無用性が次の豊かな思想へと発展する。それと同時に、その作品の読者に対して何でも引き出せる可能性を与えている。カミュはそこからまっ先に自由を引き出したのである。ここに至って我々は、カミュにおいて、自由が不条理によってどのように提出され、またそれが反抗の世界においてどのように成就していったかを分析しなければならない立場に置かれたのである。

カミュは不条理と自由との関係を次の様に解明している。

「私が知る唯一の自由は、精神並びに行動の自由である。ところで不条理が永遠の自由への私の一切の機会を滅ぼしてしまうのだが、逆に不条理は私に私の行動の自由を与えた高揚させるのである。」(ibid. p. 140)

不条理の人間の自由は、哲学的な立場から考えると、世界の様々な現象を不条理と判断することから生じる。なぜならば、彼はそう判断することによってあらゆる決定論的な因果律から免れ得るからである。自由とは決定論の桎梏を超克した人間の自己を原因としたあらゆる可能性に他ならない。従って不条理の人間には彼に固有の自由が存在すればそれで十分であり、彼の実在を確証しない形而上学的自由や超越的自由などは意味をなさない。彼の自由は自らの意志で勝ち取るべきもので、何らかの権威や至上の存在から与えられるべきものでは決してない。このことは決定論や宿命論を克服することに依存している。しかし、絶対に避けることのできない<死>という宿命を考慮しなければ、本当の自由を獲得することはできない。カミュは、不条理が死の意識を覚醒すると主張している。それと同時に、不条理との邂逅こそ、奴隷状態から自由への橋渡しとなるものであることを教示している。まだ現実化しない将来のことを頼んで生きている人は、それらの事象に拘束されて生きているのであるから、彼がいくら自由を確証しようとしても、自由の幻想を生きているに過ぎない。また、不条理を意識しない人間は、人生に意味を与えることによって、彼の生活や思考を限定する。彼の行動と精神に対する弁解は、非合理なことさえも正当化するために、彼を束縛する。結局、この様な人間は、自由の夢を食って生きているだけである。この夢を粉碎するのが不条理である。将来に対する目的や計画や意図は、死という絶対者を前にして等価物となることによってすべてが意味を失う。この不条理の啓示によって、人はいかなる将来をも頼りとしなくなる。また自己を限定するあらゆる人生の意味を承認しなくなる。しかも、自分はまちがいなく死ぬのだということを心の底から悟る。その時初めて不条理の人間は、自分を束縛するものは何もないと実感するのである。

「不条理は、明日というものはないということ、この点を私に明らかにする。今後はここにこそ私の深い自由の理由があるのだ。」(ibid. p. 141)

不条理の人間は、<死>以外の一切のものから解放されている。彼にとって死後の自由などは問題にならない。永遠性は彼を呪縛できない。なぜならば、彼は永生を望まないのだから。彼は神から自由でいたいと考える。神と自由に関しては、人間が自由であるため

には、超越的な存在は必要かどうかということが問題となる。人間を統率する何らかの存在が必要かという問いには、不条理の人間は、それは<死>であるとししか答えようがない。なぜならば、彼が神に到達するためには、「飛躍」しなければならないから。

神における自由では、罪を考慮しないでは自由を取扱うことはできない。

「神の前にあっては次の二者択一が認められる。即ち、人間は自由ではなく、全能の神に悪の責任があるか、それとも、我々は自由と責任を持ち、神は全能ではないか、この二者択一である。」(ibid. p. 140)

言うまでもなく、不条理の人間は後者を選ぶ。しかし、この論理は神の存在を認めた時のみに成立する。不条理を「神のない罪」とであると定義する不条理の思想では、キリスト教における罪が不条理そのものに置き代わっている。これは、神によって罪が許されたわけでもなく、自ら神になって罪を克服したというのでもない。彼は生れながらにして罪を感じないのである。この点において、キリスト教徒ともキリーロフとも異なる。不条理の人間は常に神の世界の外で生きる。キリーロフのように、わざわざ神を意識的に否定するまでもないのである。彼には、自己の限界を逸脱するものは一切無用である。神に背を向けた不条理の人間の無罪についてカミュは次の様に断言している。

「人は不条理の人間に罪があることを認めさせたがる。彼は自分が無罪だと感ずる。実を言えば、彼はこれしか、どうにもならない自分の無罪しか感じないのだ。彼に一切が許されているのはこの無罪のためである。」(ibid. p. 137)

不条理の人間の全面的な自由は、モラルの点から見ると、彼の「無罪」に依存している。また、不条理性のために、或る原因に対して特定の結果を因縁づけることができないから、一切が可能になる。しかも、或る原因は或る結果を呼ぶことはできても決定することはできないから、何をして良いのかわからないという状態にも追いこまれやすい。「一切が許されている」状態とは苦渋に満ちたものである。なぜならば、限界のない自由の不安に絶えずさいなまれるからであり、また、不条理より生じた動かしがたい死の意識がつきまとうからである。従って不条理は一方的に解放したりはしない。

「すべては許されているということは、何一つ禁じられていないという意味ではない。不条理はただこれらの行為の結果を等価にするだけである。」(ibid. p. 149-150)

しかし、不条理は、行為を選択するための指標となるべき価値判断を持たない。しかも、神に対しての自由はあっても、罪に対する責任の根拠がない。不条理から生じる反抗は自殺は拒否できても、他者の意識をともしなわないから、論理的には殺人を正当化することも拒絶することもできなくなる。殺人さえも、他の行為と「等価」となる危険性がある。この宙ぶらりんの状態こそ、ニヒリズムが最もつけ入りやすいところである。それ故に、不条理の思想は、<一粒の麦>として死ぬ運命にあったのである。不条理を形成している「三位一体」の状態にとどまっているということは、ただ飛躍のない認識の世界に閉じこもっているだけだから、行動の法則となるべきものがない。不条理の哲学によって生

じる行為の等価性とその行動の法則を見出すためには、反抗の論理を待たなければならなかったのである。この反抗の論理を、キリーロフの反抗と比較してみるとその姿が一そう明らかになる。

不条理が個人の意識や宿命にかかわるのに対して、反抗は人類全体の意識にかかわるから、連体性とその支柱となっている。キリーロフは確かに神に反抗したが、反抗的人間の必須の条件である連帯性の意識が欠けていた。即ち、彼のひとりよがりの論理には、「我れ反抗す、故に我ら在り」の「我ら」が不在なのである。それどころか、「キリーロフ反抗す、故にピョートル・ヴェルホーヴェンスキーとその一味在り」ということになってしまった。というのは、キリーロフの自殺は暗黙のうちに、シャートフの殺害を容認していたからである。究極において神になることのできない人間の自己の生命に対する無関心が、他の生命に対しても無関心を示す。キリーロフには生命よりも絶対的自由の方が大切であるという自家撞着が「人類愛」とともに同居していたのである。彼は、神の欺瞞に対しては反抗できたが、自己の観念の重みに押しつぶされて、人間の欺瞞には反抗できなかった。最も崇高な目的を持った自殺が、最も卑劣な手段のために利用されたのである。結局、キリーロフも本当の自由を得ることができなかったという点では、キリストの十字架の二の舞を演じたのに過ぎなかった。彼の自殺がもたらした「恐るべき自由」は、テロ行為を誘発するニヒリズムの道に通じていたのである。個人の宿命を克服して自殺しないでおくための最大の手段である不条理の提出する反抗は、このニヒリズムに対して何ら裁定することはできない。しかし、連帯をともなった反抗の思想は次の様に判定を下すことができる。

「神となるために自殺するキリーロフが、ヴェルホーヴェンスキーの『陰謀』に自分の自殺が利用されるのを承諾する様に、人間が自らを神とみなすことは、反抗が明るみに出した限界をうち破り、策略と恐怖政治の泥まみれの道に否応なしに自らを引き入れるのだ。そして歴史は、まだこの泥んこの道を拔出してはいないのである。」

(『反抗的人間』第三章歴史的反抗, Pléiade 版, p.582)

ここにおいて、ニヒリズムに挑戦する反抗の姿が一段と鮮かに浮彫りにされている。キリーロフの様に人間の条件を超越して神になろうとすることは、殺人をも許容する絶対的自由を獲得しようとするものであるのに対して、反抗の論理における自由は、自己の限界を明晰に意識しているために相対的なものになるのである。またカミュは、不条理に欠けていた行為を正当化させるための根拠を反抗の論理においては次の様に「正義」に依存させている。

「反抗者の論理は、人間の条件の不正を増さないために、正義に奉仕することを望むことにある。……反抗の結果は、殺人の合法化を拒絶することである。それは、反抗が原則的に死に対する抗議だからである。」(ibid. p. 688-p. 689)

ここに至って反抗は、もう一つのニヒリズムである殺人を完全に拒絶できる。しかし、

ニヒリズムの根は恐るべきほどに強く深いものである。カミュ自身にとっても歴史にとっても偶然な一事件が、この誠実な歴史の証人を葬り去り、彼のニヒリズムに対する挑戦を中絶させた。今なおニヒリズムは新しい相貌をもって、世界に対する悪魔的な滲透を止めない。カミュの警告の言葉がその輝きを失わないために、人間は自己の意識を完全に目覚めさせ、ほとんどシジフォスの様な報われない努力を執拗に続けなければならないだろう。この努力が続く限り、ドストエフスキーが提出し、カミュが受けついだニヒリズムと自由の問題は依然として、日々に新たなのである。